

吉田富三

吉田富三賞は日本癌学会と浅川町と吉田富三顕彰会が、偉大ながん研究優れたがん研究者に授与して、その功績を表彰し、あわせてがん研究には、浅川町がふるさと創生を機に、全町あげて、吉田富三博士の顕相互信頼の絆がある。又、財団法人浅川町吉田富三顕彰会は、吉田富

吉田富三教授の指導を受く。一九五〇（昭和二十五）年同医学部助教授。米国立癌研究所研究員（一九五二～五五）。昭和三十三年福島県立医科大学教授（病理学）。昭和三十五年東北大学抗酸菌病研究所肺病部門教授。同研究所長併任（昭和五三～五十九）年。一九八四（昭和五十九）年定年退職、福島労災病院院長を務めた。吉田肉腫・腹水肝癌を用いた発癌・増殖・転移・腫瘍血流の研究を行う。癌昇圧化学療法を提唱。日本癌学会・日本癌治療学会・日本肺癌学会名誉会員。東北大学名誉教授。

第七回 平成十年



黒木 登志夫
(くろき としお)

●プロフィール
一九三六（昭和十一年）東京生まれ。一九六〇（昭和三十五年）東北大学医学部卒業。インターンを経てがん研究に入る。東北大学抗酸菌病研究所（現加齢医学研究所）肺病研究部助教授。九六〇（昭和四十二年）東京大学医学部研究部肺病研究部助教授（九七〇～九八四年）を経て、九八四～九八六年まで同教授。この間、米国のウィスコンシン大学に留学（九六九～九七二年）、WHO国際がん研究機関（フランスリヨン市）に勤務した（九七五～九七八）。一九九六年三月東京大学退官。四月より昭和大学腫瘍分子生物学研究所長、東京大学名誉教授。専門は発がん細胞の細胞生物学。
吉田富三教授の孫弟子に当たり、二〇〇〇年日本癌学会会長に内定。一九七〇（昭和四十五年）試験管内発がん実験により第四回高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。一九九八年（平成十年）日本癌学会吉田賞受賞。英文発表論文は二〇編、邦文発表総説は四五編、邦文編著書は三編に及び、代表編著書に「九八四年朝倉書店」科学者のための英文手紙の書き方（一九九九年朝日新聞社）朝日選書「八四」がん細胞の誕生（一九九六年中央公論社）中公新書「九〇」がん遺伝子の発見（一九九六年日経サイエンス社）細胞内のシグナル伝達」がある。

九六二～六四、六八年）。昭和四十七年奈良医大教授（腫瘍病理学）。昭和四十九年名古屋市立大学医学部教授（病理学）。ドイツ国立癌研究所センター客員研究員（一九八二～八三）。多くの発癌の病理学的研究を行い環境中から多量の発癌物質を発見した。厚生省食品衛生調査会、文部省学術賞、学校法人審議会議常任委員、日本癌学会、病理学会、毒性病理学会、毒科学会、各理事を歴任。高松宮妃癌研究基金学術賞、武田医学賞、紫綬褒章、アメリカ毒性病理学会名誉会員。平成六年名古屋市立大学学長。

第八回 平成十一年

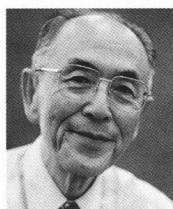


吉田 光昭
(よしだ みつあき)

●プロフィール
一九三九（昭和十四）年富山県高岡市生まれ。一九六六（昭和四十一年）年富山大学薬学部卒業。一九六七（昭和四十二年）東京大学大学院博士課程修了。東京大学薬学部助手。この間（一九七〇～一九七二年）、イギリス Medical Research Council Laboratory of Molecular Biology, Cambridge に留学。九七五（昭和五十年）財団法人癌研究会、癌研究所研究員となり、同部長。九八九（平成元年）年東京大学医学部研究所細胞化学研究部助教授。一九九〇～一九九一年に東京大学医学部研究所長（教授併任）。一九九九年（平成十一年）定年により退官。四月萬有製薬株式会社つくば研究所所長。東京大学名誉教授。
がんウイルスとその発がん機構の分子生物学的研究を専門とする。ヒト白血球ウイルスを日本患者より分離し、その全ゲノム構造を決定して、ヒト白血病ウイルスの分子生物学的基盤を確立した。この貢献により、高松宮妃癌研究基金学術賞、武田医学賞、朝日賞を受賞。一九九八年日本分子生物学学会会長、文部省の各種調査委員会委員、日本癌学会、日本ウイルス学会の理事を歴任。日本分子生物学会、日本生化学会の評議員、外国の専門誌五誌の編集委員。

研究所研究員。一九七五（昭和五十）年東北大学薬学部教授（衛生化学講座）。一九九三（平成五年）年同薬学部教授。一九九四（平成六年）年東北大学名誉教授。からだの細胞による癌細胞のメカニズムの研究などにより癌の免疫研究発展に寄与した。また、化学発癌物質による発癌メカニズムの研究において多くの新知見を発表した。各種の文部省調査委員会、厚生省薬事審議会委員、日本癌学会、日本薬学会、日本免疫学会、各理事を歴任。高松宮妃癌研究基金学術賞、日本薬学会賞、紫綬褒章を受賞。平成六年日本学術会議会員。平成七年（財）佐々木研究所所長。財団法人浅川町吉田富三顕彰会名誉評議員。

第九回 平成十二年



小林 博
(こばやし ひろし)

●プロフィール
一九二七（昭和二年）札幌に生まれる。一九五二年に北大医学部を卒業。一年のインターンのあと米国立癌研究所病理学教室で病理学の研鑽に励み、のちに米国立癌研究所病理部に留学。帰国後に新設の北大癌研の病理部門の助教授、次いで一九六五年教授に就任し当時の北大癌研（六部門）の創設とその発展に貢献。北大教授在職二十六年の間、学生部長、評議員、癌研施設長などを歴任。
がん研究一筋に歩み、一九八一年から日本学術会議がん研究連絡委員会、一九九一年から同会議がん・老化研究連絡委員会を務め、また一九八一年財団法人札幌がんセンターの設立に参加し、一九九〇年には日本癌学会会長を務めた。
一九九一年に北大停年とともに北大名誉教授、札幌がんセミナー理事長に専任のほか、北海道医療大学教授、北海道医師会道民健康教育センター長を併任。その間財団法人中医学交流センター顧問として日中医学交流に励み、また日本がん免疫外科研究会、日本がん転移研究会、日本がん予防研究会の発足に盡力。最近ではスリランカにおける口腔がんの予防にも貢献している。
著書は専門書のほか、がんとの対話（春秋社）、癌との対話（北大図書刊行会）などの啓発書も数多い。一九八六年に「がん細胞の異物化」の研究業績で日本医師会医学賞を受け、また一九九〇年には病理学の研究で紫綬褒章を受けた。